

曲目解説

リード：アルメニアン・ダンス パート 1

《アルメニアン・ダンス》の「パート 1」と「パート 2」は、全 4 楽章で構成されるコンサートバンド/ウィンドアンサンブルのための組曲で、アルメニアのクラシック音楽の創始者であるコミタス(1869-1935)の民謡集に収録されたアルメニア民謡に基づいて作曲されている。

この組曲の第 1 楽章を収めた「パート 1」は、5 曲の民謡で構成される大規模な交響的ラプソディで、これらの民謡が現代の本格的なコンサートバンドの書法で自由に処理・展開されている。リードはメロディや和音、リズムの可能性を広げ、独唱や合唱ではない交響的な合奏による民謡へのアプローチを開拓した。西洋社会は十分に知られていなかった美しい民謡をほぼ独力で保護し、その貴重な財産を世界に紹介したこの輝かしい楽曲は、初演から 50 年経った今もなお、色あせない魅力に満ち溢れている。

ラヴェル：「スペイン狂詩曲」より I 夜への前奏曲 IV 祭り

《スペイン狂詩曲》は、フランス印象派を代表するだけでなく、西洋音楽史の中でも革新的な作品を残した、モーリス・ラヴェル(1875-1937)による最初の管弦楽作品である。ラヴェルの故郷は、フランスの南西部バスク地方であり、雄大なピレネー山脈の向こうにあるスペインは、彼の創作の源泉であった。色彩豊かな民謡、躍動する舞曲のリズムは生涯にわたってラヴェルの関心の中心にあったが、作曲においては直接的な引用を行っていない。スペインのリズムや旋法、こぶしのきいた装飾的な節回しといった基本素材をきわめて自由な感覚で取り入れることによって、ラヴェルの夢のなかにある理想のスペインを見事に表現しているのである。I 夜への前奏曲は、弱音を基本とする、夢想的で神秘的な音楽である。オリジナルでは、弦楽器パートにミュートが付けられ、パートの分割によって柔らかで透明な響きが生まれている。特徴的な下降音形「ファミレド#」の減 4 度、不安定で緊張感を生み、第 4 曲にも使用されることから曲全体をまとめる役割を果たしている。IV 祭りは、スペイン舞曲、ホタのリズムによる華麗な終曲である。曲は 3 部形式で、印象的な旋律が次々に登場し、自由に音楽が構成される。再現部では様々な旋律が自由に再現され、熱狂の中で曲は閉じられる。

モーツァルト：「クラリネット協奏曲」より 第 2 楽章

《クラリネット協奏曲》はモーツァルトが協奏曲のジャンルで残した最後の作品であり、クラリネットのための唯一の協奏曲である。友人でもあり、クラリネットとバセットホルンの名手であったシュタドラーのために作曲された。こうした名手と作曲家の関係は、ウェーバーやブラームスにもみられ、いずれも、優れた演奏家と作曲家がともに歩んだ時代の作品たちである。

多くの音楽家から「クラリネットのために書かれた作品の中で、最も美しいもののひとつ」と評される 2 楽章は、イ長調によって書かれている。様々な調性に名作を残したモーツァルトであるが、彼にとってイ長調は傑作《ピアノ協奏曲第 23 番》などとともに、特に大切にしていた響きを持っていた。晩年のモーツァルトの音楽の情調である、静かに澄み切った響きの中にクラリネットが融けあい、オーケストラと対話し、比類無い天上の音楽が広がってゆく。